令和５年度　伊那市立伊那北小学校評価表

学校関係者評価；（A：十分達成された　B：ほぼ達成された　C：不十分であった）　自己（項目間相対を加味した到達度）評価（a：十分達成された　b：ほぼ達成された　c：不十分であった）

学校教育目標	重点目標（中長期的目標）
かしこく なかよく たくましく 子どもたちの未来のための学びがある学校づくり 「伊那北の自然・地域とともにある学校」 「すべての子に学びの場がある学校」	○特別支援教育の充実 ・チーム支援力の向上 ・多様な学びの場の提供と教育相談、支援会議の推進 ・ユニバーサルデザインの視点による授業づくり、合理的配慮の提供
	今年度の重点目標
	(1)手をとりあいて学びつつ「主体的・対話的な学び」 ・読み書き・計算力の定着　・自分の目で見て調べる学習 ・友との学び合いのある授業　・自己調整力を育てる学習
	(2)広き世界にまじわりて「人間関係力」 ・凡事徹底、率先垂範　・ちがいを認め合える学級づくり ・異年齢交流の推進　・国際理解教育の充実
	(3)清き自然にめぐまれて「体験を通した心身の健康」 ・地域学習の充実　・健康的な生活習慣の確立 ・体力、運動能力の向上

総合評価

○　児童アンケートでは、多くの項目で子どもたちの肯定的な思いが伸びていることが見られた。特に「授業中、友だちの話や考え、先生の話を聞いていますか」「授業中、先生や友だちは、あなたの意見を聞いてくれますか」の項目に伸びが見られたことから、児童が学級内の居心地の良さを感じたり安心して学べていたりしたことが分かる。職員が学級・学年を超えて子どもたちに声をかけ、その様子を職員間で伝え合うことを心がけてきたことが、これらの姿につながったと考える。

○　保護者アンケートでは、「ご家庭では，家庭学習の習慣作りに努めている」が大きく伸びたことから、家庭の協力が得られ、家庭学習の習慣化ができている児童の増加につながっている。また、「学校は，何か相談したときに，適切な対応をしている」などの学校全体に対する項目についても、昨年度よりも回復しており、保護者と学校の信頼関係が改善されてきている。

成果と課題	評価	改善策・向上策
(1)　手をとりあいて学びつつ「主体的・対話的な学び」 ○「授業は分かりやすいですか」91.4%（↗） ○「授業中、先生や友だちは、あなたの意見を聞いてくれますか」94.9%（↗） △「授業中、分からないことを聞いたり、自分から意見を言ったりしますか」　72.0%（↗）	A b	○MIMやｽﾋﾟﾗ式漢字学習法の導入、また、AIドリルの活用の継続。 △AI ドリルの活用については、学級間で活用の頻度に差が出てきているので、学校全体で取り組める工夫をしていきたい。 △間違えることへの不安を感じている児童が安心して学べる授業のあり方を研究する。
(2)　広き世界にまじわりて「人間関係力」 ○「学校はたのしいですか」93.4%（↗） ○「家庭や学校、近所の人にあいさつをしていますか」89.5%（↗） ○「先生や友だちは、あなたのよいところや、がんばっているところを認めてくれていますか」93.8%(↗)	A a	○「学校は楽しい」と感じている児童の割合が昨年度より 3pt 増加。教育活動や行事が戻ってきたことによって、学校生活が充実してきているものと思われる。 ○あいさつをする児童の割合も２年連続で上昇。地域とのつながりを大切にしたい。 ○仲間の努力や良さを認め合える学校・学級づくりを今後も大切にしたい。
(3)　清き自然にめぐまれて「体験を通した心身の健康」 ○「里山や地域での活動、健康な体づくり、運動などを通して、心も体もたくましく元気になるように努力をしています」　90.3%（R5初） ○「給食はおいしく感謝して食べていますか」94.9%（↘）	A a	○学年ごとに里山での遊びや体験学習が位置付けられており、地域の方々との交流を通して、清き自然の中で子どもたちが学ぶことができた。 ○給食については、昨年度より 2.5pt 下がったものの 90%を超えており、引き続き食を通して児童の心身の健康を保てるようにしたい。

領域	対象	評価項目	評価の観点	成果と課題	評価	改善策・向上策
教育活動	教育課程	○　思考をめぐらせたり、体験を通したりして学ぶ教育活動の展開をする。	(1)子どもの今までの経験を生かして考えたり、体験的な活動を大切にしたりする授業の工夫ができたか。	○　里山での学習については、森の大切さについての考えを深めていけるように学年ごとにカリキュラムが作られている。本年度も、地域の方のご協力をいただき、予定をしていた体験学習を行うことができた。 △　職員、児童ともに６年間の里山学習の全体像を知り、見通しをもって体験活動に向かう準備を進められるとよかった。	A a	・総合的な学習の時間や生活科における探究的な学びにつながる活動にしていきたい。 ・年度当初に地域の方からお話を聞く時間を設けるなどして、児童が見通しをもって体験活動に参加できるようにしたい。
		○　客観的な学力・課題の把握と手立てを行う。	(2)客観的な学力の把握と課題解決に向けての取り組みができたか。	○　全学級で年２回（１年生は１回）の Q-U 検査を実施。さらに講師に結果の分析を依頼し、各学級において支援が必要な児童について職員で共通理解を図った。 ○　低学年では、MIM-PM のｽｸﾘｰﾆﾝｸﾞにより、児童の読み書き等の定着度を把握し、支援が必要な児童には放課後学習を勧め、学びの補充を行った。	A b	・分析結果を後期の授業改善に生かし、児童の学びにどのような変化がみられたか、共有できる時間を設けていたい。 ・他学年、他学級の結果を互いに知ることで、担任が自学級の改善に向けた計画を立てる機会を定期的に設けていきたい。
	学習指導	○　授業のねらいを明確にした学習活動やめりはりと学び合いのある授業展開にする。	(1)「ねらい・めりはり・見とどけ」を大切にした、児童が主体的に活動し、対話のある授業への改善ができたか。	○　「めあて」「まとめ」「振り返り」のシートを配付し、板書を構造的に示した。 ○　振り返りの観点を明確にし、授業の終わりに観点に沿った振り返りを記述することができる児童が増えてきている。 ○　MIM やｽﾋﾟﾗ式漢字学習法が児童の学習理解の基礎になり、徐々に自己肯定感を醸成してきていると考えられる。	A b	・授業のねらいが達成できたかどうか、児童の振り返りから評価できるようにする。 ・ICT を活用した板書のあり方や児童の記録の残し方について今後も研究を深めていきたい。
		○　自己表現力の育成と、それを受け入れることができる人間関係づくりをしていく。	(2)自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりしながら、考えを深められるような人間関係づくりができたか。	○　スクールタクトを活用することで、学習問題に対する友達の考えを同時に確認することができ、それを基に自分の考えを再構築する児童の姿が見られるようになった。 △　人前で自分の考えを発表することに自信が持てない児童が多い。	B b	・児童が間違いを恐れず、安心して学べる学習集団となるよう努める。 ・ICT の活用は表現に自信がもてない児童の学びの助けにもなるが、自分の考えをもつ前に友達の意見に影響されてしまうことがあること等から、一人で考える時間を確保するなど、授業の進め方などを工夫する必要がある。
	生徒指導	○　チームワークで取り組む生徒指導を充実させる。	(1)生徒指導上の問題を、学年主任、生徒指導主任、特別支援ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ、教頭のもとに情報収集し、全校職員のチームワークで指導にあたることができたか。	○　担任、学年主任、教頭、生徒指導主事、特別支援ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ間で報告・連絡・相談が適切に行われたことで、様々な事案に対応することができた。 ○　各学級の心を寄せたい児童について全職員で共有し、様々な職員が声をかけたり、様子を伝え合ったりすることができた。	A a	・児童の支援や問題の対応を担任が一人で抱え込むことなく、チームで対応することを今後も大事にしていきたい。 ・保護者と学校が児童に対して同一歩調で支援していくことができるように、必要に応じて支援会議を行っていく。
			(2)特に支援を要する児童に対して、フェイスシートを活かして全職員で連携して指導にあたることができたか。	○　フェイスシートの入力については、支援員などにも協力してもらい、全職員が必要な時にフェイスシートを見返して困り感を把握できるようにして、より有効な支援に生かすことができた。	A b	・フェイスシートは月ごとに紙に印刷するなどして、必要な時にすぐに手に取れるようにする。担任は記録の追加や確認を行うことで、児童の変化をいち早く察知できるようにする。
学校運営	安全	○　PTA、見守り隊、ウォーキング隊の協力による登下校の見守りを行う。	(1)PTA 校外指導部、見守り隊、ウォーキング隊の活動を通して、地域の方に登下校の安全・安心を見守っていただくことができたか。	○　毎日の下校時刻を月ごとに PTA、見守り隊、ウォーキング隊に配付し、登下校の安全確保に協力していただくことができた。	A a	・集団下校を実施する場合や、登校・下校時刻が変更される場合は、安心・安全メールを通して確実に周知し、児童の安全安心な登下校の見守りをお願いしていく。
		○安全点検による修繕箇所の割り出しと早急な修繕措置を行う。	(2)毎月初めの職員による安全点検を通して、校内の危険箇所、修繕箇所を割り出し、早急に修繕することができたか。	○　安全点検は、毎月初めに実施。修繕箇所を教頭が把握し、校務技師とともに修繕することができた。	A a	・教頭、校務技師で対応できない箇所については、市教委と相談のうえ、計画的に修繕していただくようにしていく。
	地域と	○　学校応援団、里山学習を通して地域社会と連携を図り、地域に開かれた学校づくりをする。	(1)学校応援団や里山学習を通して、地域との連携を図り、校外に開かれた学校にする。また、そのことを学校通信やホームページ等により発信し、情報の共有が図れたか。	○　学校応援団の皆さまによる活動は、本年度は計画どおり実施することができた。年度末には、学校応援団の皆さまに全校児童からハガキを送り、感謝の気持ちを伝えた。	A a	・学校応援団の方々との連携を今後も深めていき、奉仕作業の受け入れや教育活動の補助などを互いに申し入れることができるような仕組みを作る。 ・校舎の一部を地域に開放し、学校と地域のつながりを一層深められるようにする。

	の連携	○　保護者との連携を密にすることで、学校との信頼関係を構築していく。	(2)家庭訪問、保護者懇談会、授業参観や懇談会を充実させたり、児童の体や心を考える講演会を実施したりして、家庭と連携して子どもの指導にあたれたか。		○　児童の欠席が３日続いた場合は、担任が電話連絡や家庭訪問をするなどして、児童の様子をうかがうようにした。 ○　12 月に実施した学校保健委員会では、歯の健康に関心のある保護者に参加いただいた。	A a	・経済的・環境的な支援の必要がある家庭には、市教委（子ども相談室）や社会福祉協議会、保健師、医療機関等の力も借りながら、チームで支援していく。
	研修	○　児童の成長を願い、PTA と連携し学校教育を進め、家庭教育を支援する。	(1)PTA と課題を共有し、PTA 講演会や校内外の研修などに積極的に参加できたか。		△　学校や PTA が主催となって「情報モラル」や「人権（LGBTQ）」についての保護者向けの講演会を２度企画したが、多くの保護者に参加していただくことができなかった	B b	・講演会を行う際には、事前に学校の教育課題について保護者と問題意識を共有するなどして、一緒に課題解決に向けて考える機会を設けていく。
		○　教職員の自己研鑽の場を設ける。	(2)年に一度、授業を公開して、お互いに参観し合うことを通して、研修を深め、自己課題を持つことができたか。		○　各学級での心を寄せたい児童について出し合い、様々な職員がそれらの子どもの見方について語り合うことで、様々な方面から児童理解を高めることができた。 △　授業公開の機会を何度か設けたが、参観の観点を事前に共有できるとよかった。	A b	・授業公開を行う際は、参観する職員が授業の一場面でも、見て気が付いたことを伝え合えるような仕組みを作りたい。